

生物シリーズ

はりまの博物学者
おおうえ ういち
大上宇市が記録したきのこ

Fungi recorded by Uichi Oue

姫路科学館 学芸・普及担当 宮下直也

2024 年 9 月 20 日、大上宇市勉強会（代表・木南哲也）により「大上宇市ワールド 第 2 号（きのこ編）」¹ が発行されました。同会は 1865 年揖保郡香島村篠首（現・たつの市新宮町篠首）生まれの博物学者・大上宇市（以下「宇市」）（写真 1）の業績を顕彰することを目的に活動する団体です。この冊子は、宇市による研究資料「二千菌譜 蕈類」を分かりやすく紹介するために、宇市が観察記録を残した 58 種のきのこ（表 1）について、同資料の複写と解説文、該当種の生体写真を組み合わせて編集されました。

姫路科学館でも 2023 年度に企画展「はりまの博物学者・大上宇市」を開催し、博物学研究における宇市の足取りを追ってきました。今回はその中からきのこ研究について紹介します。



写真 1 大上宇市の肖像
（たつの市教育委員会提供）

表 1 「大上宇市ワールド 第 2 号（きのこ編）」の掲載種（五十音順）

アイタケ	エノキタケ	サイギョウガサ	チチタケ	ハツタケ	マツオウジ
アカヌマベニタケ	オウギタケ	サクラシメジ	ツエタケ	ハラタケ	マツカサキノコモドキ
アカヤマタケ	オオムラサキアンズタケ	ササクレヒトヨタケ	ツチカブリ	ハリガネオチバタケ	マツタケ
アケボノタケ	カラカサタケ	シモコシ	ツルタケ	ヒダサカヅキタケ	ミドリスギタケ
アブラシメジ	キツネタケ	シャカシメジ	テングタケ	ヒナアンズタケ	ムラサキハツ
アラゲカワキタケ	キツネノカラカサ	ショウゲンジ	ドクツルタケ	ヒノキオチバタケ	ヤグラタケ
イタチタケ	キツネノハナガサ	シロオオハラタケ	ナラタケ	ヒメカバイロタケ	ヤブニワタケ
イチョウタケ	キヒラタケ	シロホウライタケ	ニオイコベニタケ	ヒラタケ	ワカクサタケ
ウスタケ	クリタケ	スエヒロタケ	ニガクリタケ	ベニテングタケ	
ウマノケタケ	クロハツ	タマゴタケ	ニワタケ	ホンシメジ	

■大上宇市と博物学

博物学とは、役に立つ／立たないにかかわらず動植物や鉱物について広く研究する学問で、現在は自然史科学とも呼ばれます。宇市は幼少より体が弱く、薬に格別の興味があつたため、初めは本草学（薬物を中心に役に立つ動植物や鉱物を研究する学問）を独学し始めたのをきっかけに、博物学へと関心を広げていったようです²。宇市は菌類（きのこ）、植物、陸貝（カタツムリ）などの幅広い分野で、地域の生物相解明や新種発見といった数々の功績を挙げました。学術雑誌への投稿論文は 328 本³にも上り、

¹ 木南哲也編著（2024）。大上宇市ワールド 第 2 号（きのこ編）。大上宇市勉強会。62pp.

² 大上宇市調査委員会編著（1992）。郷土の偉大な博物学者 大上宇市。新宮町教育委員会。137pp.

³ 杉田隆三編（2004）。大上宇市と博物学—学術雑誌寄稿集—。新宮町教育委員会。280pp.

写本（手書きで写した本）や研究資料などの著作は1,000冊を超えられます。

■二千菌譜

当時、日本には菌類の知見がまとまった図鑑はなく、宇市はこのような状況を憂いて、1895年から「^{さん}参考菌譜」（菌類研究のための参考資料）の編^{さん}さんを始めました。そこから時は流れ、1918年頃から仙^{せん}台第二高等学校（現・東北大学）の菌類学者・安田^{やすだ} 篤^{あつし}に菌類標本を送り始め、同定（種名の特定）依頼をするようになりました。こうして得た菌類学の知識を基に、1922年からオリジナルのきのこ図鑑「二千菌譜」シリーズの執筆に取り掛かり、詳しい完成年は不明ですが合計11冊を仕上げました。

ここで「二千菌譜」の内容を列挙することはできませんが、ベニテングタケ（写真2）という種を例に挙げると、1915年に揖保郡西栗栖村角亀（現・たつの市新宮町角亀）で宇市が本種を採集したことが記載されています（図1）。これは兵庫県における本種の初記録となっており、また、その後も2008～2009年に朝来市で発見された⁴以外は例がなく、大変貴重な記録です。本種以外にも、宇市によって残された膨大な観察・採集記録（いつ、どこで、どのように生育していたか）とスケッチを読み解くことで、現代の私たちは当時の篠首周辺の菌類相をうかがい知ることができます。このように、詳細な記録を残すことは過去や現在のある時点を後世に語り継ぐ上で、非常に重要であると言えます。



写真2 ベニテングタケ
（平山吉澄氏撮影・提供）



図1 「二千菌譜 蕈類」表紙とベニテングタケのページ
（たつの市教育委員会提供）

■生物の記録を残す手段

生物の記録をスケッチとともに残すことは、生物の形態や行動の効果的な観察方法ではありますが、現代の価値観で考えれば「確かにその生物か」の客観性にやや欠けます。生物を客観的に記録するには、今も昔も、標本作製し採集地・採集年月日などを記載したラベルを添付する方法が取られていますが、現代ではスマートフォンやデジタルカメラを用いて、誰でも簡単にきれいな写真を撮ってGPS情報とともに保存でき、そのようなデータも客観的な記録として価値があります。

姫路科学館では、播磨圏域連携中枢都市圏8市8町で撮影された野生生物の記録写真を募集・展示する生物多様性写真展「ひめじのいきもの」を開催してきました。今年度は第8回の開催となります。写真のご投稿

（図2）、写真展へのご来場をお待ちしています。【募集期間：2024年6月1日～12月31日、展示期間：2025年3月8日～4月6日】



図2 「ひめじのいきもの」の投稿先 左：姫路市公式LINE、右：兵庫県電子申請共同システム

⁴ 山田裕司（2011）. 兵庫県で発生したベニテングタケ. 関西菌類談話会会報. 28: 10-12.

<参考>1～3ほか大上宇市関連の文献は、姫路市立城内図書館やたつの市立の各図書館でご覧いただけます